別の日。別の時間。
都内の某大学病院の応接室。
老齢の教授の前に九十九が座っていた。

「突然押し掛けてしまい、御迷惑をおかけします、先生」
「なぁに、元気そうな顔が見られて私も嬉しいよ。ときに今日はどういった用件なのかな？　キミが精神医学に主旨変えしてから、私は随分と放置されていたような気がするんだが」

老教授は穏やかな光を湛えた眼差しを九十九に向け、いたずらっぽく微笑んだ。

「出来の悪い生徒でしたから、足を向けづらかったのです。勝手に飛び出してしまいましたし」
「謙遜より冗談に聞こえるよ。キミほど優秀なフェローは数える程しかいなかったのだから」
「恐縮です」
「さて、私もそう時間がある訳ではない。本題に取りかかるとしよう」

そう言って老教授は九十九を促した。

「ＣＡＥＢＶの患者について、治療法の御相談に伺いました」
「ほう。進行の具合は？」
「ＬＰＤ（リンパ増殖症）の典型的症状から肝機能障害、肺炎などを併発しています。血栓の兆候も見られます」
「日和見症候群からの多臓器不全、か。可哀想だが長くはないな。何故そんなになるまで放っておいたのだね」
「彼は入退院を繰り返してきましたが、２００２年以前のＲｉｃｋｅｎｓｏｎの診断基準ではＣＡＥＢＶの特定には至らなかったと思われます。私も彼と関わったのはつい最近の事で」
「患者の年齢は？」
「１９歳です」
「ふむぅ…」

老教授は難しい顔でソファから立ち上がると、手を後ろに組んで窓から外を見た。

「ＣＡＥＢＶが重度疾患として認知されるようになったのは、せいぜいここ１５年ほどのことだ。世間じゃＡＩＤＳのほうが注目されていたからな。ＣＡＥＢＶはさほど耳目を集めてはいなかったし、研究自体も遅々として進まなかった。彼は運が悪かったな」
「やはりもう打つ手は無いのでしょうか」

九十九の声が沈み込んだ。

「聞いた限りでは、半月もたないだろうね」

老教授はきっぱりと言った。
沈黙。空調の音。廊下の人声だけが微かに聞こえてくる。

「やってみるかね。最後の手段だが」

組んだ手を解き、老教授が振り返った。

「え？」

うつむいた顔をがばっと上げた九十九に、老教授は微笑んでみせた。

いいかねと、老教授は言い聞かせるように九十九へ話し始めた。

「ＣＡＥＢＶもＡＩＤＳと同様、ウィルスによるリンパ球への攻撃の結果生じる免疫系の異常反応による症例だ。抗原（抗体のもとになる物質）により活性化したキラーＴ細胞などは普通、一定の時間ののちアポドーシス（自死）により消滅するが、これらの疾患では残留し続け人体に害を成す。異常抗原により不死化したＴ細胞やＮＫ（ナチュラルキラー）細胞を減少させるか除去出来れば生存の確率は高まる筈だ」
「先生、それは」
「造血幹細胞移植。これしかあるまい」
「骨髄移植ですか。しかし彼は既に…」
「そう。日和見感染症を起こしている。併発している各疾患の緩和と移植を同時にこなすのは不可能に近い。だが可能なら、あるいはな。それに問題はそれだけじゃない」
「ドナー（移植適合者）ですね」
「あぁ。今から適合者を探すには時間が足りない。可能性が高いのは肉親だが。彼に係累はいるのかね？」
「両親は他界していますが、兄弟がひとりいます」
「そうか」

傷跡がうずき、九十九はそっと胸に手を置いた。
凄まじい斬撃の記憶が蘇ってくる。
あの男がどれだけ弟を気遣っているか、はたで見ていても判る。
だが彼の死生感は自分達の想像の範疇を越えている。弟を助ける為とはいえ、素直にベットに横になってくれるような男とは思えなかった。

思えないが…
賭けてみるしかない

九十九はソファから腰をあげた。

「やってみるかね」
「先生。御教授、心から感謝します」
「直接の患者ではない者への所見だ。私は自分の言葉に責任をとる事は出来ない。無責任なアドバイスなのを承知の上で、それでもいくか」
「他に道はありませんので」
「先程も言ったように、移植と治療を同時に進めるのはほぼ不可能だ。君自身、それが判っているからこそ私に会いにきたのだろう？」
「はい。しかし先生に御会いして、やはりその方法しかないと確信しました。やります」
「そうか。変われば変わるものだな」
「？」
「キミは昔から負け戦はやらない主義だったんじゃなかったかね」

少しの間を置いて、九十九はゆっくり目の前の人物に答えた。

私は、医者ですから

◇

数日ののち、殉と加夏子は病院へ戻った。

殉はそのまま集中治療室へ放り込まれ、加夏子は言葉を交わす事も出来ないまま家へと連れ戻され両親からこっぴどく叱られた。
言い訳も許さない叱責が一晩中続き、やっと解放されたのは夜が白み始めた頃であった。

二階の部屋へと戻り、ぼうっと明るい窓の外を見ながら、加夏子はいいようのない想いにとらわれていた。

哀しみ
悦び
後悔
怒り
希望
絶望

どれも違う。
ただ呆々と広がり、自分を包み込んでいる。
暖かいような、冷たいような、不思議な想い。

あるがままって、こういうことなのかな

想いのたけをぶつけてきた。
思い残したことなどなかった。
この先の結末は、もう意味を成さなかった。

ふたりで、いきた
だから、ふたりで…

机に頬をつけ、まどろみのうちに加夏子は眠りへと落ちていた。

◇

同じ日。東京、北千住の雑居ビルの一室。
額に汗しながら室内のレイアウトを変える真山の顔は不満気だった。
いいたい放題の北山の注文、いや指図がエスカレートしてゆくたびに、汗より血管のほうが多く額に浮かび上がってくる。

「いい加減にしてくださいっ！」

とうとう真山が堪忍袋の緒を切った。

「ワガママいい放題じゃないですか、ちょっとは働いてるモンの事も考えてくださいよっ！」

北山は古びたソファにふんぞり返ったままニヤニヤと真山を眺めていた。

「俺ぁ怪我人だぜ、でけぇ声出すと傷に響くじゃねぇか。優しく扱え、やさし〜く、な」
「ったく。怪我なんか口実にしたって北さんの考えはミエミエですって」
「おやおや、じゃ言ってみな」
「『いいチャンスだから若造をこき使って鬱憤晴らししてやろう』ってなもんでしょ、どうせ」
「正しくは『アゴでこき使って』だ」

ふてぶてしく笑い、北山が煙草をくわえた。

「たのしいぜ。お前もそのうちやってみな」
「…いつかコロス…」
「ん？　なんか言ったか？」
「いーえ。なんも」

備え付けの電話が鳴った。

「ほれ。ま〜やまクン、電話だぞ！　よい仕事をとってくれたまえよ！」

とりあえず口を縫ってやろうかと本気で考えながら、真山はしぶしぶ受話器を取った。
瞬時に顔つきが変わった。